

『安心決定鈔』と師親鸞（二）

—『愚禿鈔』のアポリア—

谷川守正

一、『愚禿鈔』のアポリア

われわれは『教行信証』における主な三つのアポリアを『安心決定鈔』のその解決を前提にして、それらの解消に成功して、親鸞の仏教教育の一端を明らかにした^(注1)。

親鸞の異色といえる著作『愚禿鈔』にもその上下巻の四行題詞を初め多くのアポリアが未解決のままである。確かにそれは難解な著作といえる。われわれは^(注2)先にそれらの意味を四行題詞を中心に解決しようとしたが、アポリアの完全な解消にはいたらなかった。われわれの挫折は『安心決定鈔』をそれと密接に関連する『愚禿鈔』研究の視野に入れていなかったためである。それなしに『愚禿鈔』の四行題詞などのアポリアを解消することは不可能ではないが、きわめて困難である。しかしわれわれはいま『安心決定鈔』を『教行信証』に関係づけるだけでなく、『教行信証』のアポリアと同様に『愚禿鈔』のアポリアにも関係づけてその研究の打開策を講じることができると考えた。

われわれは前稿^(注3)において『安心決定鈔』を『浄土三経往生文類』や『愚禿鈔』の前に位置付けることに成功し、また『教行信証』の最終稿との前後関係をも明らかにすることによって『愚禿鈔』は『安心決定鈔』という新しい視野の下に見直された。

いまなお『愚禿鈔』の親鸞真蹟本は未発見のままであり、先の研究では顕智本を中心にして、存覚本、浄興寺本と校合したが、何れもそれぞれの原本を現地の寺院において詳しく内拝した^(注4)。しかしわれわれは前稿に示すよ

うに^(注5)、顕智本の影印本^(注6)が利用できる。

確かにわれわれの『愚禿鈔』研究は解明の途中段階に留まったが、四行題詞の分析によって文末が「知るべし」で終わる「応知文」を初め、「何々に就いていくつか有り」という「就有文」、上巻末尾の「七引文」など研究上のいくつかの道標を見いだすことが出来たのは、われわれの敬愛する聖人が愚鈍なわれわれにアポリアを残すはずはないという確信が予めあり、それが素朴に四行題詞に道標を発見する契機となったからである^(注7)。

そして前号において従来先行研究が見落とした『安心決定鈔』のキーワード、21例を数える接続詞の「カルカユヘニ」の機能を発見し、それを文脈把握の鍵として意味付けることが出来たのは、「応知文」の道標の有効性によるのである。「応知文」による『愚禿鈔』の上・下巻の倒置が、『安心決定鈔』の一つ書きと本文との逆転と、上・下の二巻編成に対する批判を導いたのである。すなわち「カルカユヘニ」を道標にして四章の起承転結の構成と各章五節の編成が明らかになると、空観本、蓮如本ともに二巻本であるが、分巻が章の途中になり、文脈の把握を妨げるのである。それによって一つ書きを鎌倉念仏訴訟の三答状に、本文は対決における口頭弁論にそれぞれ想定することが可能になった。さらに『愚禿鈔』の三本において顕智本のみが「上巻、下巻、下末巻」の三巻編成となり、またそのみが卷子本であり、他は冊子本である。顕智本の『愚禿鈔下』の末尾は、「応知文」の構成に着目すれば、第二応知文の後半の「是れ雑中之専行也と知るべし」で終わる。確かに四行題詞はそれぞれの第一行の「∴愚禿鈔上」、「∴愚禿鈔下」から始まり、本来二巻本であり、「愚禿」の呼称を憚って^(注8)、『二巻鈔』とも呼ばれる。

また卷子本の場合必ず巻頭の四行題詞を通して本文を読むことになり、『教行信証』の標拳文の場合より以上に四行題詞が重視されていることが分かる。しかしながら下巻の場合に分量が多いために分巻にせざるをえないが、その分巻の箇所は「就有文」の分岐点と見られると、疑問が出される^(注9)。しかしわれわれの「応知文」の道標を「就有文」に代えて主にすれば、分岐点は「応知文」の起承転結の構成の真中で区切られていることが分かる。すなわち第2対の「応知文」で分断される。したがって「応知文」が示す親鸞の自釈の文脈に従えば、下末巻の分巻はむしろごく自然であるといえる。また『愚禿鈔上』と『愚禿鈔下』の頭書きに朱の三点記号「∴」が付くが、『愚禿鈔

下末』には三点記号は付かない。しかし解説者はそれには全く触れない。それによってわれわれの疑念が生じた。

しかしながら顕智本の忠実度を示すのは、24頁の図に見るように、上巻の二機対の「・一乗円満の機は」の下の割り書き「他力なり」を薄く消して、約4字分上へ上げている点である。最初の「他力なり」の位置は「前念命終なり」の下割り書きの高さに位置を揃えている。このように文字の大きさと位置にも十分に配慮していることが分かる。

顕智本のもうひとつの特色は横罫線であるが、解説は「下本の終わり二紙には地の罫線が二本も引かれているが、なぜ二本も引かれたかは分からない。二本のうち上の罫線は、誤って引かれたものだろうか^(注10)」とする。その下の罫線は全巻を通じて引かれ、書写の墨はその範囲に収められている。しかし上の罫線は最初の一紙に見るように原文に忠実に位置付けるための目印として引かれる。老筆の場合左へ筆が進むごとに文頭の位置が少しずつ下に落ちていく傾向が認められるが、それをも忠実に書写するための基準線である。

下末の全体とくに終わりの七紙から老筆によると認められる左肩下がりの傾向は顕著になっているところから、原文は急いで、集中して纏められたために、老筆に疲労が出た事でないかと推察できる。この場合でも下の罫線の内側に文が収められている。そのために行頭の文字に比べて行末にいくにつれて、文字が小さくなっている。

また解説にあるように「料紙は三巻ともに鳥の子紙が用いられ、天地からそれぞれ一・二cmのところ横罫線が引かれている^(注11)。」われわれはそれを影印本によって確認した。しかし同時に上巻の第三紙の「就小乗教有二教」に始まる天地の罫線の間に極薄い横罫線が箇条書きの行頭を調える基準線として「金剛の真心は無碍の信海なりと知るべし」まで引かれ、次紙は「・有誓无誓対・選不選対」まで引かれ、次も「即得往生は後念即生なり菩薩なり」の行まで引かれ、さらに次紙は「又復就善機有二種又傍正有り」の行まで痕跡が見えず、その次紙とその続きにも「浄土論曰」まで横罫線が読み取れる。その後の六引文の紙には横罫白線が見えないが、天地一杯の引文の場合にその補助線は不要であろう。

しかし下巻には横罫白線が見えないのは、上巻の場合のように文の位置が重要視されないためであろう。それは三心釈の下巻と図式的な上巻との性格

の相違を物語る。なお短い試みの線が「二易行浄土本願真実」の行から「二には横超」まで引かれていて、一つの目印とされている。このように顕智本は臨写に際して原本に忠実に文字の位置、大きさまで配慮されていて、われわれは顕智本が原本にもっとも近い、きわめて忠実な写本であると考えて、それをテキストに採用して、『愚禿鈔』を研究するのである。

顕智本のさらにもうひとつの、しかも重要な特色は、異色といえる奥書である。上巻の奥書は「建長七歳乙卯八月二七日書之 愚禿親鸞八十三歳」の左横に「永仁元年癸巳十月六日書写之^(注12)」としながら、下末巻には奥書がない。原本もそうと推定できる。しかし存覚本には『真宗聖教全書』に見る通りに、上・下巻に奥書が付き、浄興寺本についても同様であるが、この場合下巻の奥書には「今校合御真筆本上巻許有之下巻御奥書無之」と存覚は付言している。このことは上・下巻の倒置法^(注13)を間接的に裏付ける。

倒置法によれば、不自然に見える『愚禿鈔』上巻の奥書は自然な位置になり、それに伴い『愚禿鈔』の結論も当然上巻の末尾に位置するはずである。この観点からわれわれは先に^(注14)難解な『愚禿鈔』の結論を上巻末尾の第七対の「応知文」に見い出すことができた。

倒置法なしに『愚禿鈔』の結論を正しく見いだすことは至難事であろう。それ故に『愚禿鈔』の四行題詞の意味と結論が先行研究においてアポリアであった。『愚禿鈔』の解説によれば、「最後に残る問題は、聖人は誰の為に、何の目的でこれを著されたのかと云うことだが、それは全く今後の研究課題である^(注15)。」が、われわれは前号に論じたように、『安心決定鈔』を前提にすれば、聖人は明らかに性信の為に、鎌倉念仏訴訟の終息を図る善後策として『愚禿鈔』を著したと主張する。先行研究のアポリアは『安心決定鈔』との関係を視野に置かないために生じたといえよう。

『安心決定鈔』と『愚禿鈔』とは本来密接に関係するから、どちらから接近しても、両者のアポリアは解消に導かれるはずである。われわれは両者の関係の文脈を辿って、問題解決の糸口を見いだすことが出来たのは、『教行信証』のアポリアの場合と同じである。

二、四行題詞の意味

『愚禿鈔』アボリアの第一はしたがって上・下巻の同文の四行題詞のもつ意味にある。先行研究は「上」、「下」以外の漢字が上下巻とも全く同じであるところから、同じ四行題詞が両巻共にある事に付いてその意味を深くは解読できず、石田瑞麿の現代語訳『愚禿鈔』は下巻冒頭の善導の『観経義』の一節「不得外現賢善精進之相内懷虚仮」から単純に類推して、「賢者信は……を装っている。愚禿心は……を装っている。」と外現内懷の関係とする。たしかに内外関係はこのように読める。しかし石田は賢者信を賢者と、愚禿心を愚禿と同一視し、それから四行題詞の標拳文としての重要な意味を捉えていない。

また「賢者の信を聞きて」を賢者から信を聞くと受け取り、愚禿が心の内実を顕すその心について明確にしない。しかしわれわれは何故「愚禿」なのか、誰から聞くのか、賢者の信とは何を指すのか、賢者とは誰のことか、愚禿が心とは愚禿一人の心か、賢者の信において内外対、賢愚対はどのようなのか、そしてそれに対して愚禿が心はどうであるのか。したがって賢者の信と愚禿が心はどのような関係にあるのか、さらに『愚禿鈔上』と『愚禿鈔下』との関係において、上巻と下巻との関係はどうかを、この四行題詞についてまず問いたい。そのためにわれわれは前出の石田が類推する『観経義』の「内懷外現」の関係枠組みから脱却することから始めなければならない。

鎌倉念仏訴訟時に危機的状況にあった八十三歳の親鸞が、建長七年秋に『教行信証』の改訂版を『安心決定鈔』の作者と目される性信に授与することによって、師弟の間で一種の間接的師資相承が成立したが、それをより明確にするために大きな転換を遂げた親鸞思想の要諦を『愚禿鈔』に当事者の弟子の性信自身に対しては極めて分かりやすい形にして示したのである。われわれがそれを認知するためには自らも当時の状況に置かれた性信の視点に立ち、『安心決定鈔』を通して『愚禿鈔』に接近する必要がある。

『教行信証』の後序に示されるように親鸞自身の師資相承は法然から面授されるが、法然が『選択集』の書写を許し、絵像の書写を通じて、間接的に賢者の信を親鸞の耳に聞かせるとともに、「真文」を示して、法然浄土教の新しい世界観^{（注16）}を提示する。

ここにいう賢者とは具体的には『教行信証』の行巻末尾の「正信念仏偈」の「弘経大士宗師等」を指し、この言葉によって性信はもうひとつの識語を行巻の尾題の後に加えたのである。先行研究はそれが何故そこにあるのかについて明らかにしないが、そこにも同じような識語を置いたのは、「正信念仏偈」の「道俗時衆共同心唯可信斯高僧説」の教示を受けて「正信念仏偈」を明性への師資相承にしようとしたものに他ならない。

その「真文」の「世」の字の脱字は、『歎異抄』の後序にいう「ひとへに親鸞一人がためなりけり」を暗喩し、また『選択集』の書写と内題の字に添えられた「釈淨空」の名之字、そして絵像の書写における間接的対面からも愚禿一人の心への師資相承である。

賢者の信を聞き^(注17)て、愚禿が心を顕すとき、賢者の信と愚禿が心との関係を示すのが、四行題詞の第三・四句である。第三句は賢者の信について内は賢にして外は愚なりと定義付ける。それは二世界論から成立し、その内的世界は賢であり、外的世界は愚である。内因は賢、外縁は愚と言い換えることもできる。しかしそれは決して外は愚を装っている意味ではない。それだけでは親鸞の名を付けた『愚禿鈔』の標挙文には到底値しない。

それに対して愚禿が心は内的世界が愚であり、外的世界が賢である。愚禿が心は確かにそうであるが、内的世界が賢であり、外的世界が愚である賢者の信を聞いて、内的世界が愚でありながら外的世界が賢である愚禿が心を顕すのである。それは賢者の信と一体となることを意味する。われわれはこの一体的関係に『安心決定鈔』の通説的名目の「機法一体」の関係と合い通じると考えるのである。それ故に『安心決定鈔』が道標になる。

賢者の信を聞くことなしにはそのような愚禿心と賢者信との関係は成立しないが、幸いにも愚禿心が賢者信とそうに関係づけられて、顕される。それは具体的に賢者の信である「浄土真実教行証文類」を顕することになる。『教行信証』とはそのような顕現を指すのである。そのことは『教行信証』の後序の「師教恩厚」に明らかである。

もししらの愚を自覚して四行題詞の精粗の逆転に着目すれば、誰でも容易に『愚禿鈔』の上下巻の倒置に気付くはずである。両者の本文についても表記の精粗の逆転があり、とくに下巻の観經の三心から大經の三信への転換が下巻の末尾の「応知文」に読み取れる。したがって四行題詞はまた第七「応

知文」の機法一体的関係図式へ案内する道標になる。

三、七対の応知文

われわれが『愚禿鈔』の死生観の教育哲学的研究』で取り上げて、起承転結的文脈を明らかにした七対の「応知文」の他にも、厳密に云えば三つの「応知文」があり、「知るべし」の返り点が中央に位置する特別な形がある。それは下巻の「∴六決定者 已上次の如し、知るべし」の形であり、「第六依此経深信」を除く「七深信」に見られる「決定」の語を指すのみで、われわれの「応知文」の対象から除いたが、他は上巻「二教対」末尾の「・已上四十二対 教法に就いて知るべし」と「二機対」末尾の「・已上十八対 二機に就いて知るべし」の二つであり、それは「∴真実浄信心は・内因ナリ∴ 摂取不捨は・外縁ナリ云々」の『愚禿鈔』の結論部分にあたる五行を挟む形に位置する一対となっている「応知文」であり、後述するように、『安心決定鈔』の「機法一体」に対する親鸞の「機法一体」の関係概念を示唆するという重要な役割を担うのである。しかし前稿では結論部分を示唆するに留まり、『愚禿鈔』による性信への師資相承を十分には解明できなかった。

われわれは当時『安心決定鈔』の介在を全く想定できず、結論部分の重要性を認識していなかった。また文字の大きさと位置についてもそれらのもつ重要な意味を迂闊にも見落としていた。その上に卷子本のもつ独自の視野についても全く自覚していなかった。すなわちわれわれは影印本の顕智本（24頁の図）と刊本の『真宗聖教全書』とを判別していなかった。

そのことは「二教対」の下割書きについても同様のことがいえる。そこには「本願一乗海は頓極速円融円満之教也 知るべし」と「浄土の要門は定散二善方便仮門三福九品之教也 知るべし」との一対の「応知文」があるが、「二機対」の下割書きには「一乗円満の機は 他力なり」と「漸頓廻向の機は 自力なり」とあるだけで、一対の「応知文」はなく、「他力なり」と「自力なり」とは一段と小さな字である。先にわれわれが見逃したこれらの表記の意味は、われわれの解説にとって重要な手がかりになる。

『愚禿鈔』の大方は四行題詞を初め、上下巻を通して箇条書きにされ、三種類の朱点記号（∴…∴）によって、大・中・小区分が印されて、箇条書が

体系的に図式化され、独自の論理的構成を道案内する。また「応知文」と「就有文」は『愚禿鈔』の死生観の敎育哲学的研究に述べたように、その道標に加えられ、『愚禿鈔』の明快な理解を助ける。

その「点記号」について『愚禿鈔上』と『愚禿鈔下』の各四行題詞に三点記号が頭書され、題目も大区分として全体の構成の下に位置付けられ、他の内題の場合と区別される。われわれの倒置法が成立するのは、上下巻がその位置に固定されるとは限らず必要に応じて入れ替えも可能であることを表示するのが、この朱点記号の意味である。

なお卷子本の表紙には『愚禿鈔上』、『愚禿鈔下』そして『愚禿鈔下末』が内題に合わせて外題にしているが、勿論本文とは別筆である。その下末巻は第二対の「応知文」によって分断されることは『愚禿鈔』の構成上重要な道標^(注18)であることを表す。

起承転結の連詩構成になる七対の「応知文」は、必ずしも簡単に発見できない。第二・三・五・六対は比較的分かりやすいが、第四対が下巻末の「応知文」と上巻の敎相判釈の続きの「応知文」との組合せになるだけに、先ず上・下巻の倒置法に気付き、上巻を下巻の後に繋ぐことによって初めて、第四対の組合せが成立する。そしてそれが親鸞のこの時期における思想的転換点を力動的に実践させるから、その発見は容易でない。

『愚禿鈔下』が善導の『観経義』から始まるのは下末巻末尾の「応知文」を導くためである。すなわちそれは「ひそかに観経の三心往生を案ずれば是れ則ち諸機自力格別の三心也大経の三信に帰せしめんがため也諸機を勧誘して三信に通入せしめんと欲もう也三信は斯れ則ち金剛の真心不可思議の信心海也亦即往生は斯れ則ち難思議往生真の報土也便往生は即ち是れ諸機格別の業因果成の土なり胎宮迎地懈慢界雙樹林下往生なり亦難思往生也と知るべしと」の「応知文」と「唯阿弥陀如来選択本願を除く已外大小権実頭蜜(ママ)の諸敎皆是れ難行道聖道門なり又易行道浄土門之敎是れ浄土廻向発願自力方便の仮門と曰く也知るべしと」の「応知文」との対である。

起承転結に関してこの対は上巻の起と下巻の結に当たる。七対は下巻の最初の第一対に気付けば、上巻の第七対の発見は困難ではない。結論部分にあたる第七対は『愚禿鈔』全体を凝縮するだけに文字の大きさと位置付けと点記号が極めて錯綜し、複雑な構造^(注19)をもつが、それらがすべて結論を理解

するための重要な鍵となる。

重要な転換点を示す第四対の前者は、『安心決定鈔』の一つ書きの第二の「四種往生の事」に対して先ず『教行信証』の標挙文に新しく三往生を付け足す。すなわち証巻に「必至滅度之願 難思議往生」そして化巻に右傍に「無量寿仏観經之意」と朱書された「至心発願之願」の下に、「邪定聚機 雙樹林下往生」と割り書きし、その次の行に「阿弥陀經之意也」と右傍に朱書された「至心回向之願」の下に、「不定聚機 難思議往生」と書く^(注20)が、その趣旨を明確にしたのが、それに続く『浄土三経往生文類』(略本)であり、これは表紙裏に「横曾根報恩寺」の墨印があり、性信への授与が示唆される。

そこには大經の難思議往生、観經の雙樹林下往生、そして小經の難思議往生が分かりやすく述べられるが、『愚禿鈔下末』の末尾の「応知文」では「観經の三心往生を案ずれば是れ則ち諸機自力格別の三心也大經の三信に帰せしめんがため也諸機を勧誘して三信に通入せしめんと欲もう也三信は斯れ則ち金剛の真心不可思議の信心海也亦即往生は斯れ則ち難思議往生真の報土也便往生は即ち是れ諸機格別の業因果成の土なり胎宮辺地懈慢界雙樹林下往生なり亦難思議往生也」と即往生の難思議往生と便往生の他の二つと対立させ、前者を焦点化するのである。観經の自利の三心から大經の利他の三信への帰入が下巻の結論であり、それは上巻初めの「応知文^(注21)」において批判的に解明される。

第四対の「応知文」を承けるのが、第五対のそれである。すなわち「本願一乗は頓極頓速円融円満之教なれば絶対不二之教一実真如之道也と知るべし」と「金剛の真心は無碍の信海なりと知るべしと^(注22)」の組合せである。それを二教対について教法批判するのが転句に当たる第六対の「本願一乗海は頓極頓速円融円満之教也知るべし」と「浄土の要門は定散二善方便門三福九品之教也知るべしと」の「応知文」である。

四、第七対の応知文

『愚禿鈔』の結論はしたがって「応知文」の起承転結的展開から第七対の応知文に示される。複雑な構図の第七対は『愚禿鈔』の白眉といえる。それは図に示すように、「・真実浄信心は・内因ナリ・摂取不捨は・外縁ナリ



『顕智本上巻』第七対「応知文」

本願を信受するは前念命終なり 即得往生は後念即生なり 即チ正定聚之数
即ノ時必定ニ入ル 又必定ノ菩薩ト名ヅクル也^(注23) 他力金剛心也知るべし」
と「∴便ち彌勒菩薩に同じ 自力金剛心也知ルベシ 大經ニハ次如彌勒ト
言マヘリ」との対である。なお割書を片カナ表記する。

この一節は朱点記号に特色が見られる。「∴眞実淨信心は」、「∴攝取不捨は」
「∴便ち彌勒菩薩に同じ」と三句に三点記号が、「・内因ナリ」、「・外縁ナリ」
の両句に一点記号がそれぞれ付くが、「他力金剛心也知るべし」、「自力金剛
心也知ルベシ」には付かない。

われわれはこの一節の図式的表示から次のことを読み取ることが出来る。

1. 「応知文」の構成によって「他力金剛心也知るべし」のところで分節できる。
2. 「・真実浄信心は・内因ナリ」と「・摂取不捨は・外縁ナリ」は同じ三点記号によって対等であるが、両者は「・便ち弥勒菩薩に同じ」と併置される。
3. 「他力金剛心也知るべし」は前半の結語である。
4. 「自力金剛心也知ルベシ」に大経からの引用文が付く。
5. 「自力金剛心也知ルベシ」は割書に対して「他力金剛心也知るべし」が重要である。
6. 善導『礼讃』の「前念に命終して後念に即ち彼の国に生て」(信巻末の真仏弟子釈)の「前念命終」と「後念即生」が分割さるが、「前念」と「後念」は一体になる。
7. 「内因」と「外縁」の内外も因縁として一体となる。

石田はこの一節を訳すとき、『真宗聖教全書』に依るために、三つの引用文を「本願を信受するは云々」と「即得往生は云々」の下に平均して配置して、「真実にして清浄な信心は、＜浄土の生まれる直接の内的条件であり、＞救い取って捨てない仏の恵みは＜外的条件である。＞本願を信じて心に深くたもつというのは、かりに死の一瞬を境にした時をかりていえば、その直前の命の終わるときのことである。＜文には「すなわち、仏になることが約束された（正定聚）位にはいる。」という。＞即時に浄土の往生できるというのは、死の一瞬のその直後にすぐ浄土に生まれることである。＜文に「時またず必定に入る」といい、また「必定の菩薩と名付ける」という。＞つまり、その信心は、仏より与えられた他力の金剛不壊の信心である、とわかるだろう。また言葉を換えて云えば、その信心は、たやすく弥勒菩薩と同じになるということである。＜ただし弥勒自身は自力で金剛不壊の心をかちとったものである、とそうわかるだろう。『大無量寿経』には「弥勒につづく人たち」といわれた。＞」とする。

石田の補注によれば顕智本と存覚本を使い分けて訳出する。割書を＜＞書きで示しているが、石田は三引用文が二河譬に依ることを見落としている。また内因を直接の内的条件、外縁を間接の外的条件と訳すが、ここは内因と

外縁との関係によって、真実浄信心と摂取不捨との関係を『教行信証』の行巻の「光号因縁」において親鸞が内外の因縁和合を説くように相即不離の関係に置く。内外の因縁和合の関係にある両者はむしろ教巻序にある親鸞の心情を吐露した後半部分にある両者を指すことがここでも見落とされる。

すなわち「噫ああ弘誓の強縁多生にももう合いがたく真実の浄信億劫にも獲がたし偶たま行信を獲には遠く宿縁を慶こべ若しまた此のたび疑網に覆蔽せられればかへって復眩劫を逕歴せん誠なるかな摂取不捨の真言超世希有の正法聞思して遅慮することなかれ」にいう「真実の浄信」と「摂取不捨」がそれに該当する。「真実の浄信」とは真実の清浄な信心であり、『愚禿鈔』では「真実浄信心」という。

そして摂取不捨は弥陀の真実の言葉であり、誹謗を許さない正法であり、その本願を信受したのが賢者信であり、これを聞き分けることを躊躇ってはならないと愚禿が心から勧信するのであり、それはそのまま四行題詞の趣意にも通じる。それは本願の縁であり、『愚禿鈔』では、「外縁なり」とする。

また石田は「信受スルハ本願ヲ前念命終ナリ」と「即得往生ハ後念即生ナリ」を別にするが、善導の『往生礼讃』に云う「前念命終後念即生」は「相応一念」の関係であり、それを「信受本願」と「即得往生」の関係にするのが文意であり、両者がそのような一念的關係にあるのが「他力金剛心」であると親鸞は図式的に強調する。

その関係にあるのはまた三つの引用文においても示される。それ故に三つの引用文はその関係を裏付けるのである。存覚本のようにそれらを分離すべきでなく、その意味で顕智本の書写の態様はここの文意に沿うものである。

さらに石田は他力金剛心と自力金剛心の応知文における図式的関係をも見落としているのである。「弥勒菩薩に同じ」であるが、これは割り書きの自力金剛心であり、われわれには不可能であると親鸞は他力金剛心を強意する。したがって「真実浄信心」と「摂取不捨」との内外因縁と「本願信受」と「即得往生」との相応一念が「他力金剛心」の構図であり、それが図式的表示によってこの一節の前後にある二教対と二機対とを媒介する。

二教対四十二対に「教法に就いて知るべし」とあり、二機対十八対に「二機に就いて知るべし」とあるが、他の「応知文」とは異なり、訓点がないので、他とは区別される。それは機と法についての単なる相対的対置ではなく、

厳しい批判が多く、対の構造に明示される。二教対と二機対の対置は、信巻序の「末代の道俗近世の宗師自性唯心に沈んで浄土の真証を貶す定散自心に迷い金剛の真信に昏し」の痛烈な批判に通底する。

五、聴覚的世界と視覚的世界

『安心決定鈔』の本文は、「一つ書き」が陳状の三答状として文語調であるのに比べると、格段に「イフ」が多用されることから分かるように、鎌倉念仏訴訟最終段階における性信の口頭弁論の聞き書きであり、性信の反論、批判、主張が声で表現され、すべての漢字に付けられたフリカナから明らかのように、聞き違えなく、趣旨を徹底するように、接続詞の「カルカユヘニ」や反復や言い換え、その接続詞を手引きとする四章の起承転結の漢詩構成などによって、裁判の席における説得力を一層強めている。それはいわば性信が編み出した独自の聴覚的世界に有効な一種の弁論術であるといえる。

それに対して『愚禿鈔』の図式的表現は、とくに顕智本の卷子本仕立てに強調されるように、パノラマ風であり、文字の大きさと位置によって文意が鮮明になるとともに、広い視野の下に捉えられて、思想的構成が一目瞭然である。それは『安心決定鈔』の本文の聴覚的世界に対していわば視覚的世界といえる。例えば第七対の応知文は、卷子本を中心に左右に展開して見れば、右の「教法に就いて知るべし」と左の「二機に就いて知るべし」とが視野に入り、機法一体の構図が視覚的に捉えられる。勿論第七対についてもさらにきめ細かい読取りが出来るよう視覚的に工夫されている。

言うまでもなくこれは関東の弟子に対する遠隔指導の方法のひとつといえる。機法一体的関係概念は予め四行題詞の構図にも顕される。これが本文の図式的表記の道標になる。われわれはここに親鸞がこの師資相承に精根を傾け尽くしたことがよく分かる。

仏教的世界観における聴覚的世界と視覚的世界の統合は、法然の師資相承にも認められる。例えば勅撰和歌集続千載集釈教歌「月影」^(注24)は視覚的世界を聴覚的世界の和歌に託して弟子の歌人の宇都宮蓮生に師資相承した名品であり、主著『選択本願念仏集』を約めた「一枚起請文」^(注25)は源智によって口述筆記された華文であり、添え状が語るように法然自筆の花押は

「下生」^(注26)と読ませるばかりでなく、その書き様はそのまま「一枚起請文」の遺訓を実践的に表現する師資相承である。

口述筆記の弟子の目にその書き様は先ず楷書を模した「下」の字から始まるが、墨の濃淡を精査すれば明らかになるように、丁度「文不知の愚とんの身に」なったように書かれる。次の「生」の字は流麗な書体で書かれながら、先の「下」の字をなぞるように、まるで「尼入道の無知の輩に同じうして」、自然な花押の形に仕立て、その結果は「智者の振る舞いをせずして」、その素振りすら見せずに、花押に三つの口の形を表して、大きな口はア、小さい口はウ、そして横に開いた口はイに読み取らせて、ナ(ア)ム(ウ)アミ(イ)ダ(ア)ブ(ウ)の口の形を作っていると、その口の位置によって同時に音階をも表し、さらに中央の線は念仏の両手を表して、「口は一向に念仏すべし」の実践を花押の動線によって弟子にその場で示唆するのである。その花押はしたがって視覚的世界と聴覚的世界が見事に念仏の実践において統合していることが分かる。

その浄土宗の念仏行を実践させる花押は、たしかに「智者たちの沙汰し申さるる観念の念仏にも非ず」、また「念の心を悟りて申す念仏にも非ず」を暗示し、さらに「極楽往生のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思いとて申す外には別の仔細候わず」の自然な境地の表現であり、そして文字通りに「この外に奥深き事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ本願にもれ候べし」といえる。それ故にこの花押は「一枚起請文」のすべての趣旨を約めたものといえる。

その花押は「下生」の文字を視覚的に意味するとともに、「一枚起請文」として口述した聴覚的世界を統合した作品である。それは不思議に今日まで「下生」の文字さえ読み解かれなかったが、われわれはこの弟子の口述筆記は同時に師の最後の肉声の備忘録であると解する視点からそのようにも読み取ることが出来たのである。

勿論それに立ち合った弟子にはそのことは十分理解できるはずであり、『一期物語』から知られるように、弟子はその花押に読み取れる遺訓どおりに専修念仏指導者の生涯を全うした。ただその例外は阿弥陀仏の胎内に納めた源智願文である。なお花押論は別に稿を改めたい。

『愚禿鈔』の図式的表現は『安心決定鈔』の本文の聞き書き的表現を前提

にして初めて聴覚的世界を視覚的世界によってより厳密に体系的に補足することになるのである。しかし先行研究は両鈔の関係について触れていないために、本来親鸞思想の道標になるはずの『愚禿鈔』が皮肉にもアポリアになったままである。しかし両鈔の関係について明らかに出来たわれわれは、両鈔を相互に道標にする事によって両者の理解を深めるのである。

例えば『愚禿鈔』の図式的表現の典型の一つである四行題詞の内外賢愚の機法一体的関係において、「内は～にして外は～也」は、上下各二度計四度繰り返される表現である。その「にして」は本文中には見えない独自の関係詞である。またそれは『安心決定鈔』でも「機法一体にして南無阿弥陀仏なり」が四度重ねて出る。それは両鈔の機法一体的関係概念の共通性と関連性を示唆する。

しかしながら両鈔を比べれば批判的方法について対立する面があり、『安心決定鈔』の一つ書きは裁きの庭における三問三答の対立性から、自力に対する他力の批判的位置付けが見られ、法然に依拠する往生論についても同様であるが、本文においては浄土教などに対して包摂的、融合的であり、浄土教を初め広く真言、小乗教までも含む法体系である。

対称的に上巻初めの第四対応知文の後半の「唯除阿弥陀如来選択本願已外大小権実顕蜜の諸教皆是れ難行道聖道門なりまた易行道浄土門之教是れ浄土廻向発願自力方便仮門なりといわくなり知るべしと」において厳しく信巻序の批判をより徹底する。

このように『愚禿鈔』は『安心決定鈔』の補充的批判が至る所に認められるが、例えば上巻末の七引文などの意味ならびに「第七には又深心の深信者は決定して自力を建立せよと」p.318と「第七の又深心深信者は決定して自心を建立するに就二別三異一問答有り」p.320との自力と自心の関係について『真宗聖教全書』は最初の自力を自心に変える^(註27)問題などは別に稿を改めたい。

この研究は、平成十四年度佛教大学特別研究助成を受けた。深謝。

- 注1. 『『安心決定鈔』と『教行信証』のアポリア』『仏教大学教育学部論集第14号』
2003年3月、pp.41～56
- 注2. 『『愚禿鈔』の死生観的教育哲学的研究』、『仏教大学総合研究所紀要第2号別冊
東西の死生観』1995年3月、pp.141～160
- 注3. 『『安心決定鈔』と師親鸞（一）その成立の研究』『仏教大学教育学部学会紀要創
刊号』2002年3月、pp.21～33
- 注4. 『『愚禿鈔』の死生観的教育哲学的研究』p.142, 脚注（6）、（7）
- 注5. 『『安心決定鈔』と師親鸞（一）その成立の研究』p.26
- 注6. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』pp.293～343、真宗高田派教学院編1999年
- 注7. 『『愚禿鈔』の死生観的教育哲学的研究』pp.143～152
- 注8. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』、pp.639
- 注9. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』p.646, 「その分巻の状況を見ると、素直に
納得できない点がある。それは下本巻の末尾近く、正雑二行を分類する中で、「又
復就……」を何度も何度も繰り返している途中で巻が分断されているからであ
る。章節の区切りに依らない便宜的な分け方のように見える。」しかし章節の
区切りを表す三種の朱点記号について、「ただこのマークは原則として「章節
の分科」と認められるが、全体を通してみると、必ずしも整理統一されておらず、
理解に苦しみ箇所がないではない。」としているから、われわれはしたがって「応
知文」の文脈を優先させるのである。因に『真宗聖教全書』の底本である京都
常楽寺蔵存覚写本は朱点記号を省略する。
- 注10. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』p.640
- 注11. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』p.640
- 注12. この位置にこれを書くのは顕智は上下逆転を認知していたことになる。
- 注13. 倒置法は四行題詞の訓点を精読すれば容易に気付かれるが、『安心決定鈔』の
倒置法によって両者を相互に関係づけることもできる。このことに気付かない
解説は、『愚禿鈔』を「未定稿本」(p.647) と見るのである。この説によれば、『愚
禿鈔』の結論部分はどこにも見えないことになる。すなわちこれは親鸞の未完
の著作と見られている。すなわち未定稿の根拠にこの解説は、「この書には尾
題がどこにもないことである。」(p.647) とするが、親鸞の『尊号真像銘文』に
も尾題はない。また『一念多念文意』、『唯信抄文意』についても同様である。『教
行信証』のような尾題が付かないことは必ずしも根拠にならず、むしろ奥書が
自然な位置付けを与えられていることに意味がある。
- 注14. 『『愚禿鈔』の死生観的教育哲学的研究』p.150
- 注15. 『影印高田古典第2巻顕智上人集上』p.644

- 注16. これはまた拙稿「法然－蓮生の勅撰釈教歌と仏教教育～生涯教育の一古典モデルとして～」、『仏教教育と人間の研究、斎藤昭俊教授古希記念論文集』、2000年に論じたように法然の勅撰釈教歌「月影の和歌」を通じて蓮生に、拙稿「法然と源智の対話的師資相承における死生観的教育哲学的研究」に論じたように黒谷金戒光明寺蔵の宝物「一枚起請文」を通して愛弟子の源智に、それぞれに師資相承されたのである。
- 注17. 教巻序「聞きがたくしてすでの聞くことを得たり。」と述懐する。
- 注18. 十指に余る多くの作者説を生んだ多彩な『安心決定鈔』の体系的內容理解を導く道標が独自の接統詞「カルカユヘニ」に対応して、同じ機能をもつのが、『愚禿鈔』の「知るべし」である。しかしそれに気付かない先行研究は迷路に陥る。二つの道標はともに起承転結の構成になる。
- 注19. その図式的構成によって機法一体的他力金剛心の構図が明らかにされる。それを理解するために、顕智本は不可欠である。但し卷子本が冊子体に印刷されているために、出来れば同じサイズの卷子本仕立てにして横長の一覧にするほうが分かりやすい。それは資料2の形式では不十分である。また卷子本の特性を生かして、上巻と下末巻は倒置すれば両者が入れ替わって、第四対の関係が捉え易くなる。
- 注20. 坂東本の三往生の標挙文は明らかに最終稿に書き加えられたものである。
- 注21. 『愚禿鈔』は教相判釈と安心領解の書とされるが、その本質は連詩的な起承転結の「応知文」の体系であり、四行題詞に示されるように賢者の信を聞いて愚禿心を顕すという他力金剛心の独自の構図にある。確かに「応知文」は親鸞の自釈であるが、それは『愚禿鈔』に位置付けられることによって特別な意味を帯びる。
- 注22. 親鸞の漢字にはワープロの第二水準にもないものが少なくないが、意味に支障のないかぎり、類似の漢字を用いる。
- 注23. 三つの引文は二河譬の「汝の言は行者也これ則ち必定の菩薩と名く龍樹大士十住毘婆沙論に即時入必定と曰く曇鸞菩薩の論に入正定聚之数と曰へり」からの引用であり、これからも倒置法を証明することが出来る。
- 注24. 「法然－蓮生の勅撰釈教歌と仏教教育」参照。
- 注25. 「法然と源智の対話的師資相承における死生観的教育哲学的研究」参照。
- 注26. 「法然と源智の対話的師資相承における死生観的教育哲学的研究」のp.195の図3の花押参照。なお、これについての詳論は稿を改めたい。
- 注27. p.468 上1

